

令和7年度第1回山形県農林水産技術会議 議事録

開催日時：令和7年9月16日（火）13：30～15：30

開催場所：山形県建設会館中会議室 No. 2、オンライン

出席委員（五十音順）

網干 貴子 委員 井上 夏 委員 岡部 優子 委員 押野 和幸 委員
菊地 郁 委員 渋谷 知暉 委員 曾我 朋義 委員 西澤 隆 委員
養松 郁子 委員

欠席委員

木村 直子 委員 藤田 直樹 委員 山中 高史 委員 我妻 飛鳥 委員

協議事項

「地球温暖化に対応した農林水産研究開発ビジョン」の改定について

農業技術環境課で説明した「地球温暖化に対応した農林水産研究開発ビジョン 第3版（案）」について、研究に対する期待や助言について発言いただいたもの

委員：昨年発言した内容を反映していただいた。さらに「こうした方が良いのではないか」という点は特段ない。ただ、長期にわたる計画と思われるため、また新たな課題が次々と出てくると存じる。その際には、順次柔軟に対応をお願いしたい。

委員：今年は本当に高温が続き、ハウス栽培にもかかわらずトマトが着果しないという事態が起きた。夏の最盛期にトマトが全く実をつけず、収穫ができなかった。調べたところ、やはり35℃以上の気温が続くと着果しないということがわかり、結果として売上も減少した。

すでに来年どうしようかという話になっており、ハウスでは別の作物を植えようと検討している。30年から40年ほど続けてきたトマト栽培だが、別の作物への転換を考えなければならないかもしれないという状況である。

また、さくらんぼ農家からは、「本当にもう作りたくない」という声も聞こえている。多大なコストをかけてようやく収穫しても、今年は全く売り物にならず、非常に辛いというお話も聞いた。高温に対する研究には大変尽力いただいているが、10年後を見据えた対策だけではなく、直近の課題にも対応をお願いしたい。

委員：現在、ナスの収穫盛期だが、先月の高温と水不足の影響で、出荷できないナスが増えている。さくらんぼに関しては、本会議の意見を迅速に反映していただき、本当に感謝している。高温対策事業や資金援助も大変ありがたく、これから頑張ろうという者にとっては非常に心強い。しかし、高齢の農家からは「今さら設備を揃えても」という意見もあり、これを契機に廃業を選択する農家も多いと感じている。一方で、3月に出された「さくらんぼ高温対策マニュアル」で先輩農家が長年培った技術も紹介されており、技術を知ることができて大変感謝している。

また、長期的・短期的な研究を進めていただいている中で、生産者は「超超短期的」な課題への対応も必要。さくらんぼであれば、今年「双子果やうるみ果が多い」となった場合に、これらをどう販売していくかという情報が必要である。手塩にかけて育てたものを廃棄するだけでは作る気力も失われるため、消費者に届けられることができれば、それが作る力にもなると考える。販売業者の方々にもアナウンスしていただき、対策を講じていく必要があると思う。

今年、産地を守りたいという気持ちを強く感じた。さくらんぼで言えば、生産者を増やしてリタイアする農家を減らすだけでなく、産地の基本である「良いもの、美味しいものを届ける」ということも重要だと考えている。良いものを作るためには、関係機関による長年にわたる研究が非常に大切である。

また、産地を守るという話を夫婦でした際に、「高温条件下でもさくらんぼを作りたいのであれば、自分がさくらんぼに適した土地へ行くという選択肢もあり得るのではないか」という話になった。農業の現場でも、技術を持ってその土地へ行く「単身赴任」のような考え方は、昔は冗談のようだったが、これからはそうしたフットワークの軽さも必要なのかもしれないと感じている。

委員：県内の農林水産業のあらゆる課題について研究が進められていることに大変驚いた。私の経営は土地利用型農業であるため、その分野のことしか分らないが、新品種が出てきても、それをどう活用するかが農家側にとって大きな問題になるのだろうと感じる。高温対策として新品種などの良い技術が多くあるにもかかわらず、農業者の高齢化が進んでいるため、なかなか取り入れられないのが現状。今後も、より取り入れやすい技術を開発していただけたらと思う。

委員：昨年、「生産者が取り入れやすい環境制御技術を導入してほしい」、あるいは「気象予報も取り入れて柔軟に対応してほしい」と意見したところ、その点を取り入れていただいた。非常にありがたく思っている。

ただ、ここ最近の猛暑は非常に厳しく、環境制御といったモデルでは対応しきれない状況になってきているのではないかと感じる。難しいことではあるが、作付体系の転換や品目の転換を順次考えていかなければならないのかもしれない。

先ほど、他の委員からは品目転換の話や作りやすい土地へ移って栽培するという話があった。これらを聞くと、やはり生産者はその必要性をより強く感じているのだと思った。長期的な視点で、そろそろそうした転換を図っていく時期に来ているのではないかと感じるため、その点について対応いただけたらと思う。

委員： 昨年のコメントに対し、それぞれ対応いただいている。各委員から様々な角度で、この状況にどう対応すべきか、品目転換の必要性も含めて意見が出ている。しかし、県として、あるいは産地として、さくらんぼ等を今後どうしていくのかという方針決定が欠けているのではないかと感じる。例えば、県が「さくらんぼは歴史と伝統があるので、大変でも続けていってほしい」という方針を強く打ち出すのであれば、それを実現するための技術開発や新しい研究だけでなく、行政面でのかなり強力なサポートがなければ不可能ではないか。昨年の時点でも、特にさくらんぼ等についてはかなりの危機感を持って話を伺ったが、今年も同様の状況である。このままでは、ものすごい勢いで農家や栽培面積がさらに減少していくだろうと考えられる。

この研究課題の成果が出るまでの 5 年、10 年の間に、産地が大幅に縮小するのではないかと懸念している。生産者が減少し、安定生産が難しくなるという状況はある程度予測できる。そうした中で、新しい技術によってどれだけ状況を改善できるのかという点も含めて議論を進めなければ、現場の厳しい状況は変わらないのではないかと考えている。

提案としては、ゲノム研究と育種技術の開発はかなり進めていると伺っているが、従来の育種の範疇と考える。掛け合わせには時間がかかり、新しい品種をこの体制で開発する場合、中長期的な目標としてしか設定できない。例えば、最先端のバイオテクノロジーを用いてゲノム編集などに挑戦した場合、自家和合性の品種を 5 年以内に作ることも可能だと思う。

委員： 科学的に様々な技術や手法を使い、きちんとデータとして出すことが、農作物を開発する上で重要なデータになると思われる。以前、枝豆の成分を測定した時に、食味に関わる成分が農家によっては 5 倍ほどの差があった。この違いがどこから来るのかは非常に重要だと考えられるため、そういったものを解析すると、もっとおいしい枝豆などが開発できるのではないかと個人的に思う。

委員： 水産分野については、前回の会議で、海水温が上昇している状況で、これまで利用されていなかった暖水性の魚の利用や流通に力を入れてはどうかと意見したが、反映されている。水温や海水温のモニタリングは重要だと思うので、引き続き対応をお願いしたい。

委員：温暖化の課題を大きく分けると二つ。一つは、既存の品種を温暖化に対応させながらどう栽培していくか。もう一つは、今まで栽培していなかったような新しい作物を栽培、あるいは利用していくかだと考えている。新しい作物を導入するには、常にブランド化戦略を考えていかなければ、なかなか売れない。北海道ではブリが獲れるようになり、「極寒ブリ」という名前でブランド化している。

今はSNSを活用するなど、ブランド化戦略でもあまり費用をかけずにできることはたくさんあると思う。そうしたツールで常に情報を発信していくという対応も、一つ重要なことではないか。ご検討いただければと思う。

以上